

戦後の日韓外来語の通時的対照研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黄,秀智 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000365

2024年1月22日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 国際日本学部 専任教授

氏名 田中 牧郎

(副査) 国際日本学部 専任教授

氏名 小森 和子

(副査) 啓明大学 教授

氏名 張 元哉

1 論文提出者 黄 秀智

2 論文題名 戦後の日韓外来語の通時的対照研究
(英語文題) A Diachronic Contrastive Study of Postwar Japanese and Korean Loanwords

3 論文の構成

1 章 先行研究のまとめと研究課題の設定

- 1.1 本研究の問題意識
- 1.2 先行研究
- 1.3 現状の整理
- 1.4 本研究の目的と課題

2 章 日韓新聞コーパス作成と外来語の語彙調査の手順

- 2.1 日韓のコーパスの現状
- 2.2 新聞コーパス作成における先行研究の概要
- 2.3 本研究で作成する戦後の新聞データ
- 2.4 2000年以降の日本新聞コーパスの作成
- 2.5 韓国新聞コーパスの作成
- 2.6 語彙分析方法

3 章 現代の日韓外来語の特徴

- 3.1 本章の目的
- 3.2 外来語の出現率の比較
- 3.3 高頻度外来語の意味分野の調査

- 3.4 抽象的な意味分野の高頻度外来語
- 3.5 ランクの違いによる類型化
- 3.6 類型別に見る日韓外来語の特徴
- 3.7 まとめ
- 4 章 日韓外来語の量的推移
 - 4.1 日韓外来語の量的推移をとらえる観点
 - 4.2 外来語の出現率の通時的な比較
 - 4.3 日韓外来語の量的推移比較
 - 4.4 日韓の外来語受容の歴史的背景とその違い
 - 4.5 まとめ
- 5 章 増加傾向から見た日韓外来語の特徴
 - 5.1 本章の目的
 - 5.2 増加傾向係数の算出
 - 5.3 外来語の増加傾向とその意味分野
 - 5.4 増加傾向から見た日韓外来語の比較分析
 - 5.5 まとめ
- 6 章 類義語と品詞の観点から見た日韓外来語の特徴
 - 6.1 本章の目的
 - 6.2 類義語との関係
 - 6.3 品詞の特徴
 - 6.4 まとめ
- 7 章 終章
 - 7.1 各章のまとめ
 - 7.2 結論
 - 7.3 今後の課題と展望

参考文献

語彙表

語彙表 1 現代日韓外来語—上位 200 語リスト

語彙表 2 現代日韓外来語—類型別語彙リスト

語彙表 3 韓国語の増加傾向係数順の外来語リスト

4 論文の概要

本論文は、第二次世界大戦後の日本語と韓国語が、外来語をどのように受け入れたかについて、量的推移と意味・用法の観点から研究したものである。日本と韓国は西洋からの地理的・文化的距離が似ていて、西洋の語彙を外来語として借用することについても共通するところが多いと言われる一方で、日本語の方がその借用の度合いが強いのではないかと指摘されてきた。しかし、その共通性と異質性が実際にどの程度であるか、どこに差異がありその差異がなぜ生じたのか、といったことについては不明なことが多かった。そのような研究状況のもと本論文は、戦後の韓国の新聞コーパスを自作し、同時期の日本の新聞についての外来語の調査結果と突き合わせるな

どして、日韓の外来語を通時的に対照し、両者の差異がどこにあるのかを指摘して、その差異が生じる事情を研究した。

1章では、研究を始めるにあたっての問題意識を述べた後、韓国語における外来語研究、日本語における外来語研究、日韓の外来語の対照研究に分けて、先行研究を整理した上で、次のような研究課題を設定している。まず、戦後から現在までの韓国語の新聞データと2000年から現在までの日本語の新聞データを整備し、先行研究で得られている2000年までの日本語の新聞における外来語の調査結果と総合し、日韓の外来語の戦後から現在までの実態を把握できるようにする。そして、日韓の外来語のありようを通時的に対照し、どのような差異があるかを明らかにし、その差異の背景にある事情を究明するというものである。

2章では、最も重要な先行研究の一つである、金愛蘭(2011)「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」による日本語の戦後の新聞における外来語を研究するためのデータ作成方法にならって、韓国語の戦後の新聞(『東亜日報』)を独自にコーパス化し、10年刻みで外来語の使用率や用例を把握できるデータを作成する手順を説明する。また、金(2011)の日本語のデータが2000年までに止まっているのを補うために、日本語の新聞(『CD-毎日新聞記事データ集』)についても2000年から2020年までを10年刻みにして同様のデータを作成する手順も説明する。いずれのデータ作成においても、日本語と韓国語の戦後七十数年間の外来語の推移を正しく把握できるようにするために、対象とする紙面の範囲、テキスト処理、単語の認定、頻度比較などについて、その方法を吟味した上で実践している。

3章では、最近20年間を現代と定義し、その期間を対象に三つの量的調査を行い、次のような結果を得ている。第一に、日韓の外来語の使用率を比較すると、日本語の方が韓国語の約1.3倍高い。第二に、高頻度の外来語の意味分野は、日本語では抽象的關係に多いのに対して、韓国語では人間活動に多い。第三に、頻度によるランク分けに基づき、日本語で高頻度だが韓国語で低頻度(JHKL)、韓国語で高頻度だが日本語で低頻度(KHJL)などの類型化を行うと、JHKLの外来語は名詞に限らず動詞にもなる用法の広い語が多い、あるいはKHJLの外来語は用いられるジャンルやテーマの狭い語が多い、などといった特徴が見出される。

4章では、戦後から現代までの日韓の外来語の使用率の推移を観察し、日本語では停滞期をさみながら現代まで安定して増加傾向にあるのに対して、日本語より遅れて増加を始めた韓国語では急増期を含めて増加傾向にあるものの日本語に追い付くことはないと述べている。あわせて、これまで調査されたことのなかった韓国語の外来語の使用率の推移については、その増加や急増の原因となった社会状況の推定も行っている。

5章では、日韓それぞれの外来語の年次別頻度をもとに算出した「増加傾向係数」を指標に、増加傾向にある外来語を特定し、その意味分野などを分析して、日韓それぞれの特徴を比較している。その結果、日本語で増加傾向にある外来語は抽象的な意味を表す語が多く、韓国語におけるそれは人間活動を意味する語や、スポーツなど特定分野で使われる語が多いことなどが判明した。

6章では、3章から5章までの日韓の外来語の特徴の比較の随所で差異が見出された、類義語との関係のあり方や、名詞用法から動詞用法への広がり方に焦点を当て、「ケース」「スペース」「アピール」「スタート」「イメージ」など具体的な語を取り上げて、その用例を観察して、意味・用法を詳しく分析している。類義語との関係については、日本語では外来語が類義語と意味を分担

しながら独自の地位を築いて定着していく傾向があるのに対して、韓国語では外来語が一時的に使用されても、最終的には類義語に回帰していく傾向があることを論じている。品詞に関しては、日本語では名詞から動詞に転じて広い用法で用いられるようになるのに対して、韓国語では動詞化は困難で限られた名詞用法にとどまる傾向があることを指摘している。

そして7章では、6章までに論述したことをまとめた上で、次のような結論を導いている。(1) 戦後、日韓ともに外来語は増加傾向にあるが、日本語が先に増加し韓国語がこれを追いかける形になっており、外来語比率は日本語の方が1.3倍多い現状にある。(2) 日本語では外来語は広いジャンルで抽象的な意味を表して用いられるのに対して、韓国語では外来語は人間活動の限られた分野に集中する傾向にある。(3) 日本語の外来語は既存の類義語と意味を分担して、定着する傾向にあるのに対して、韓国語の外来語は使用されるようになっても意味用法は広がらないまま定着せず、既存の類義語に回帰する傾向にある。(4) 日本語の外来語は名詞から動詞へと用法が広がる場合が目立つが、韓国語の外来語は名詞に限定されて動詞に拡張しにくい場合が多い。つまり、量的推移について(1)の事実を明らかにし、その事実の背景に(2)(3)(4)のような事情があったと考えるのである。

5 論文の特質

本論文の特質として、次の二点が指摘できる。

第一に、従来調査されることがなかった、韓国語の外来語の推移を把握するために、新聞コーパスを自作して、調査報告のある日本語の外来語の推移と対照できるデータを整えて、日韓の外来語の量的推移を正しく把握しているところである。日本語についても2000年以降の20年間の新聞データを自らの手で整えており、計量的方法による戦後外来語史の日韓対照研究を実証的に行ったことが特筆される。

第二に、上記のデータを用いて、外来語の意味・用法を詳細に分析することで、日韓の外来語の質的な差異について、意味分野、類義語との関係、動詞用法への拡張といった観点から明らかにし、それぞれの言語における外来語の特徴を浮かび上がらせているところである。この質的研究によって、日本語の方が韓国語よりも外来語を受け入れやすい事情の解明へと研究を展開させていると見ることができる。

6 論文の評価

上記に記した二つの特質のうち、第一の特質は、従来は漠然と考えられていた、日本語の方が韓国語よりも早くから深く外来語を受け入れていたのではないかという予想を実証したものであり、いつごろどのようにして日韓の外来語が増加し、その増加の仕方にどのような違いがあるのかを明らかにした点で、独創性が高い。

また、第二の特質は、日韓両言語で外来語の取り入れ方に違いがある理由を説明するものになっているだけでなく、意味・用法や品詞の観点から、両言語に外来語が入り込む言語内的な事情を洞察している点で、高く評価できる。

一方で、頻度の扱い方などデータ処理の妥当性に説明が望まれる点があること、用例分析に基づく意味・用法の考察を行っている外来語が必ずしも多くないこと、考察が行われている外来語についても既存の類義語との比較分析が一部にとどまっているなど、課題も指摘される。これら

は、今後さらなる調査研究によって論証を重ねる必要がある。

7 論文の判定

本学位請求論文は、国際日本学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（国際日本学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上

主査氏名（自署） 田中牧郎